

月の花挽歌 ～11. 月光川～

11. 月光川

11- 1

北から西にかけて磐梯朝日国立公園のメインとなる朝日山地や月山などの山脈が連なっている西川町は、古くから月山と湯殿山参詣のために、行者や参拝客用の宿坊や旅館を営む宿泊業で成り立ってきた。

階下で自分の名前を繰り返す呼ぶ声に、真紀は目を覚ました。

慣れ親しんだヘッドで、セーターとジーンズ姿に着がえたまま寝入ってしまった真紀は、半覚醒状態で束の間どこにいるのか気づかなかった。

カーテンを開け放しておいた窓から、月山の上空に満天の星が輝いている。

真紀は急いで髪を梳かすと、足早に階下へ降りていった。

台所では、朝子と奈美恵が紅白歌合戦を見ながら、年越しそばの支度をしていた。

初出場の絢香がラブ・バラード『三日月』を歌っている。

.....

君がいない夜だって

そう no more cry もう泣かないよ

.....

「すっかり寝込んでしまっ—」と真紀は申し訳なさそうに言った。

「起きるまでそっとしておこうと思ったんだけど、一緒に年越しそばを食べれるなんて、これから先、あるかないか分からないので、声掛けすることにしたの」と朝子が手を休めずに言った。

「具材は茸と鴨です。泊りのお客様には山菜そばをお出ししたのですよ」と奈美恵は言って、義姉への心配りを表した。

「せわしい時にすみません。でも、とても嬉しいです。(寒なめこ)に(むきたけ)ですよね！」

「真紀さん、咄嗟に二種類の茸名を挙げられるだけでも西川町民の証よ」と朝子が言う。

「証と言えば、村山弁を話す人もいなくなったでしょう」と奈美恵が口を添えた。

「んだのよ～」と朝子が方言で合わせる。

「お姉さん、お箸ば揃えでけろ」と奈美恵は目尻を下げて言った。

「んだ！んだ！んだ！」と三人は交互に言い合いながら、同郷のよしみを楽しんだ。

テレビではTOKIOが『宙船』を歌っていた。

月の花挽歌 ～11. 月光川～

11-2

鴨鍋の食材を使った年越しそばを淡いブルーの色合いの『新庄東山焼』のどんぶりで、汁まで残らず食べた真紀は、「大変美味しゅうございました」と顔をほころばせて礼を言った。

旅館のフロントのバックヤードで仮眠がてら一夜を明かす拓哉に、鍋に小分けした年越しそばを奈美恵が運んで行ったのを機に、

「ご迷惑でしょうけど、帰って来て本当に良かったと思っています」と真紀は改まった口調で言って、朝子に頭を下げた。

「何よ、水臭いわね。私の目の黒いうちは、あなたの部屋はいつでも開けておくから、帰りたい時に帰って来たらいいのよ。変に気を回すのはやめて頂戴」と朝子はたしなめてから、

「お酒でも飲みましょうか」と大きな瞳で真紀を見つめて言った。

地酒の『銀嶺月山』を熱燗にして、『新庄東山焼』のぐい呑みで飲み交わした。

日本画家横田とのゴシップは、月山の麓にある小さな町にも届いているはずなのに、その話題には一切触れてこない事も、真紀はありがたかった。

「素敵なマフラーを皆にありがとうございます。忙しさにかまけてお礼を言いそびれていたわ」と朝子は地酒をひと口啜ってから、真紀が土産に持参した『ジョンストンズ』のカシミヤママフラーの礼を言った。

紅白歌合戦は48番目のコブクロが『風』を歌っていた。

奈美恵が戻って来て、「あら、お二人だけで狛いわ。私も仲間に入れてください」と口元をほころばせて言いつつ食器棚からぐい呑みを取って来る。

「お土産のお礼を言っておきましたからね」と朝子はお酌をしてやりながら伝えた。

「今さっき蓋を開けて、拓哉さんと一緒にマフラーを巻いてみたところですよ。もったいなすぎて箱に戻しておきました。仙台に出かけた時にでもしようねって決めました」と奈美恵は礼を言う代わりに、夫婦のやり取りの話を聞かせた。

「女きりで酒盛りするなんて、初めてじゃないかしら？それも年が明けようとしている時間に！」と朝子は新発見でもしたかのように得意げに言った。

「拓哉さんひとりが貧乏くじを引いてしまったようですね」と真紀が軽口をたたいた。

「これからやり残したおせち料理の仕込みをするそうです」と奈美恵が同調する。

「板場の腕も上げてくれているので、頼りきりなの」と朝子は言って、目を細める。

テレビでは大トリの2曲前となるスマップが『ありがとう』を歌っていた。

「いつになく穏やかな年の瀬になったわね。新年を迎えるのに薄ら雪化粧しかできないでいる月山は、何だか彼らしくないわ」と徳利を傾けながら朝子はいくぶんはしゃいだ顔つきで言った。

月の花挽歌 ～11. 月光川～

11-3

7年ぶりに故郷で新年を迎えた真紀は、午前一時過ぎに自分の部屋に戻った。

酒には強い彼女が珍しく酔っていた。

ベッドに入っても目が冴えて、寝付かれないでいた。

幕を下ろしたはずである画家との愛憎劇の残滓が、女の心底で未だに熾火のごとく執拗に熾っていた。

真紀は知らず知らずの内に夭折した母の登紀子が歌ってくれた寝させ唄を頭の中でリフレインしていた。

村山地方の子守歌

ねろねろや おんねろねろや

ねむると ねずみに まんじゅうもろう

起きると おぎづに さらわれる

ねろねろ ねろねろ ねろねろやー

眠りがゆっくりと沈子のようにおりていって、真紀は夢を見ていた。

父と二人で月山の山頂を蛇行して流れる月の川を俯瞰していた。

月の光が川のように流れているせいで、瀬音はしない。異域の超自然現象を、月の川にかかる虹の端に腰かけて目を瞠っている10歳の頃の自分を、夢の中で夢を見ている真紀は懐かしんでいた。

「お前が小学校4年の時に仙台の映画館で見た『ティファニーで朝食を』の中でオードリー・ヘップバーンがギターを弾いて歌っていた“ムーンリバー”はこの川なんだよ」と父は月光川に目を細めて諭すように話したが、視線は現実には結ばれていないで、空白の時間を彷徨っていた。

「Moon River は心の深い所に流れる望郷の川ではありませんか」と真紀は父との途切れた時間や距離を埋める想いで問いかけた。

「お前は誰だ？私の娘なんかじゃない！」と突然叫んで態度を豹変させた父は、後ずさりを始めると踵を返して1マイル以上もある大きく広い月の川に光の翼を広げて飛翔した。

「お父さん！お父さん！私を置いていかないで……」と娘は必死で呼びかけるが、声になってくれない歯がゆさに喘いで口パクを何度となく繰り返した。

声にならない声が言葉に変換した時点で、真紀は残夢から解放された。

無性に喉の渇きを覚えた真紀は、薄明りを頼りに階下の台所まで行くと、冷蔵庫から500mlのビール缶を取り出しプルタブを引いて、喉の鳴るままに貪り飲んだ。

飲みかけの缶ともう一缶を抱えて自室に戻った真紀は、窓を開けて北国の冬の寒さに身震いすると、「お父さん、新年あけましておめでとう。乾杯しましょう」と月山に向けてビール缶を捧げ持ちながら独り言ちる。

注 山形県の最北部にある遊佐町を流れ日本海にそそぐ『月光川』と呼ぶ川がある。

月の花挽歌 ～11. 月光川～

11-4

夢の中で父の朝雄が導いてくれた月の川の名を映画の挿入歌と同じ“ムーンリバー”だと言いつつ示唆が、どのような記憶に起因しているものなのか。そして、娘の一言に怒りをあらわにしたのか……。

月山から吹き降ろす年明けの寒風に缶ビールを持ちながら顔を曝していた真紀は、あれは死者が記憶の川で愛別離苦を伝えたかったのか、それとも彷徨い人の咆哮だったのかもしれないと自問自答していた。

いつものように父と仙台のチェスクラブへ出かけた際に、運転中の父が映画の看板を見かけたのがきっかけで、リバイバルされていた『ティファニーで朝食を』を鑑賞することになったのは、母の登紀子が亡くなる前年にあたる1978年の真紀が10歳の誕生日の日だったので、今でも覚えている。

4月にオープンした月山夏スキー場が、真紀の通っている小学校の夏休みが始まる7月下旬にクローズして、多忙だった旅館『D』も一段落したこともあり、4カ月ぶりの仙台行きとなった。

真紀はチェス大好き人間の父が、久々の例会を反故にしてまで取った行動の訳を聞きそびれてしまった。

かつて青葉区中央1丁目にあったH劇場の冷房の効いた館内で、主人公ホーリーを演じるオードリー・ヘップバーンに魅了された真紀はスクリーンへ引き込まれていった。

終演後のロビーで興奮冷めやらぬままの真紀に、父はパンフレットを買ってくれた。

映画館の近くにある喫茶店で、チョコレートパフェを食べながら、表紙がジバンシィのドレスを着て眼鏡のモダン（先セル）をくわえた小顔に紺色のオーバーサイズなカプリヌハットを被ったオードリー・ヘップバーンのエレガントなショットのパンフレットをめくっていた真紀は、原作者のトルーマン・カポーティについての紹介記事を読み終わると、何か言い知れない熱いものに揺さぶりをかけられた衝動に駆られて、向かいの席でコーヒーを飲んでいる朝雄に、少女らしからぬ鋭い眼差しを向けて言った。

「お父さん、私、この映画の原作を読みたい」

「……。原作かぁ～。なるほどなぁ」と朝雄は声と呼吸を呑み込んでからコーヒーをひと口すすり、肩で吐息をついた。

月の花挽歌 ～11. 月光川～

11-5

父娘は喫茶店を出ると老舗書店の『金港堂本店』まで歩いて行った。

父はカウンターで調べてもらおうと、新潮文庫本コーナーから龍口直太朗訳の『ティファニーで朝食を』を見つけ出して会計時に書店オリジナルのブックカバーを頼んでくれた。

「280円の誕生日プレゼントだよ」と父は周りを気にしながら小さく笑って、娘に本を手渡した。

「ありがとう」と娘は間を置かずに言った。

アメリカの中編小説『ティファニーで朝食を』は、10歳の少女に荷が勝ちすぎた。

ましてや、映画と原作の違いが輪をかけて真紀の読解力を迷走させた。

小説は読み手によっては映像を頭の中で無限にイメージできるが、映画は完成された映像に支配されやすい。さらに映画は時間的制約があるのに対して小説は時間の経過は読者に委ねられる。

以上のように、小説をシナリオ化した時点で無理が生じるので、たいていの映画は原作を超えることは不可能に限りなく近い。

10歳の真紀にもうひとつ厄介だったことは、35年後の2013年になるが、イギリスの雑誌『トータル・フィルム』が原作を超えた映画ベスト50本をランキングしたうちの第5位に『ティファニーで朝食を』が選ばれていることである。

例えば、ベスト20本の中には、あのアーネスト・ヘミングウェイや数多く映画化されたフランス、イギリス、ロシアなどの名立たる文豪の作品は入っていない。

つまるところ、『ティファニーで朝食を』は小説も映画も優れた作品であったことが、地頭は良いけれども、語彙力と知識力が未熟だった少女真紀の感受性をみだりに揺り動かすと同時に戸惑わせる要因となったことは違いない。

原作者のトルーマン・カポーティにしてからが、観客を感動させた映画のラストシーンには大層ご立腹だったそうだし、ホーリー役にはマリリン・モンローのキャスティングを要求していたのに、色々あって、女優としては対極に位置するオードリー・ヘップバーンが起用されたことにも不快感をあらわにしていたと言うから、映画は大ヒットしたので何が正解だったのか一概には判断できない。

いずれにせよ、父の思いつきをもたらした映画鑑賞が、その後の真紀の人生を変えてしまう端緒になった。

月の花挽歌 ～11. 月光川～

11-6

小学四年生の少女が原題『Breakfast at Tiffany,s』の翻訳文庫266頁にリスクを恐れず果敢に挑むことになった。

ニューヨークを舞台に、規格外に魅力的で謎めいた女性主人公が織りなす人間模様を描いた中編小説を、10,000km余り離れた月山の麓にある主に観光を生業としている小さな町の仕舞屋の2階の六畳間の自室で少女は、健気にも難解なジグソーパズルのピースを埋めるがごとく行間を埋めるために多くの時間を費やしていた。

アメリカの歴史や文化と風習の違いなどを調べるにしても、小学校の図書館では埒が明かないので、町立図書館にも通ったけれど必要とする資料は総じて入手できなかった。

自室の窓から眺める月山の景色が夏から秋に変わり、冬へと移ろう季節が訪れても、ピースを埋める手立てに行き詰まっていた少女は、遠めに様子を黙視していた父に実情を打ち明けるしかなかった。

「怖くなったのかい？」

「え？」

「異国の大人の物語をさ？」

「怖くなるほど読み進んでいません」

「私もニューヨークへ行ったことがない。しかし、聞いたところによると、とても忙しい都だそう。どうやらヘップバーンが演じた女性は大都会の片隅に迷い込んだ妖精の化身なんだな。ニューヨークは人種のサラダボウルとも言われているらしい。今度、金港堂で『ニューヨーカー短編集』を買ってくるよ」

子ども扱いをするでもなく、父は石油ストーブに手をかざして、初めてチェスの手解きをしてくれた時のように、ゆっくりとした口調で同等の距離感で接してくれた。

田舎で天才と言われる人でも、そのほとんどが東京へ行くと凡才になるらしいが、真紀ほどの秀才でもアメリカ文学の特徴や魅力のほんの一部を理解できるようになったのは、父が再婚した年で、中学2年生の時だった。

この作家は何を言いたいのか、言葉と言葉の隙間のクオリティを恥ずかしくないレベルで繋げることができないものだろうか……、14歳になった文学少女は手ごわい殻を破ることに夢中だった。

それにしても、小説を映画化するのと同じくらいに原文の翻訳も一筋縄ではいかない。

極端に言えば、『ティファニーで朝食を』がどんなに優れた翻訳だったとしても、トルーマン・カポーティの息遣いを表現するには限界があるのだ。